武蔵野日曜聖書講筵

福音の奥義
――コロサイ書第1章19節～2章23節――

１９９２年５月10日
小池辰雄

降参させられて赦される　みな賜りたる現実　太陽に絶対依存　絶対他力本願　絶信の信　本当にキリストを受けとっているか　恵みと賜物　霊的なダイヤモンド　全キリストが奥義の中心　すべての愛は神さまから　キリストの割礼　天を相手にせよ　あらゆる過ぎゆくもの　パウロのユダヤ教の癖　天国の身証体　神さまを信ずるなら百％信じろ

【コロサイ1】

19 **神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、**20 **その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万の物をして己と和がしむるを善しと為給いたればなり。**21 **汝等もとは悪しき業を行いて神に遠ざかり、心にて其の敵となりしが、**22 **今は神キリストの肉の体をもて其の死により汝等をして己と和がしめ、潔く瑕なく責むべき所なくして、己の前に立しめんと為給うなり。**23 **汝等もし信仰に止り、之に基きて堅く立ち福音の望みより移らずば、斯く為らるることを得べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の下なる凡ての造られし物に宣べ伝えられたるものにして、我パウロはその役者となれり。**

24 **われ今なんじらの為に受くる苦難を喜び、又キリストの体なる教会のために我が身をもてキリストの患難の欠けたるを補う。**25 **われ神より汝等のために与えられたる職に随いて教会の役者となれり。**26 **これ神の言、すなわち歴世歴代かくれて今神の聖徒に顕れたる奥義を宣伝えんとてなり。**27 **神は聖徒をして異邦人の中なるこの奥義の栄光の富の如何許なるかを知らしめんと欲し給えり。此の奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり。**28 **我らは此のキリストを伝え、智慧を尽して凡ての人を訓戒し、凡ての人を教う。これ凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん為なり。**29 **われ之がために我が衷に能力をもて働き給うものの活動にしたがい、力を尽して労するなり。**

【コロサイ2】

1 **我なんじら及びラオデキヤに居る人々、その他すべて我が肉体の顔をま**

だ見ぬ人のために、如何に苦心するかを汝らの知らんことを欲す。2斯く苦心するは、彼らが心慰められ、愛をもて相列り、全き顛悟の凡ての富を得て、神の奥義なるキリストを知らん為なり。3キリストには知慧と知識との凡ての宝蔵れあり。4我これを言うは、巧なる言をもて人の汝らを欺くこと勿らん為なり。5われ肉体にては汝らと離れ居れど、霊にては汝らと偕に居りて喜び、また汝らの秩序あるとキリストに対する信仰の堅きとを見るなり。

6汝らキリスト・イエスを主として受けたるにより、其のごとく彼に在りて歩め。7また彼に根ざしてその上に建てられ、かつ教えられし如く信仰を堅くし、溢るるばかり感謝せよ。

8なんじら心すべし、恐らくはキリストに従わずして人の言伝と世の小学とに従い、人を惑す虚しき哲学をもて汝らを奪い去る者あらん。9それ神の満ち足れる徳はことごとく形体をなしてキリストに宿れり。10汝らは彼に在りて満ち足れるなり。彼は凡ての政治と権威との首なり。11汝らまた彼に在りて手をもて為ざる割礼を受けたり、即ち肉の体を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり。12汝らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中より甦えらせ給いし神の活動を信ずるによりて、彼と共に甦えらせられたり。13汝ら前には諸般の咎と肉の割礼なきとに因りて死にたる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦し、14かつ我らを責むる規の証書、すなわち我らに逆う証書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、15政治と権威とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給えり。

16然れば汝ら食物あるいは飲物につき、祭あるいは月朔あるいは安息日の事につきて、誰にも審かるるな。17此等はみな来らんとする者の影にして、其の本体はキリストに属けり。18殊更に謙遜をよそおい、御使を拝する者に汝らの褒美を奪わるるな。斯る者は見し所のものに基き、肉の念に随いて徒らに誇り、19首に属くことを為ざるなり。全体は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神の育にて成長するなり。

20汝等もしキリストと共に死にて此の世の小学を離れしならば、何ぞなお世に生ける者のごとく人の誡命と教とに循いて、21『捫るな、味うな、触るな』と云う規の下に在るか。22（此等はみな用うれば尽くる物なり）23これらの誡命は、みずから定めたる礼拝と謙遜と身を惜しまぬ事とによりて智慧あるごとく見ゆれど、実は肉慾の放縦を防ぐ力なし。

●降参させられて赦される

一度に一章というのは、随分、乱暴なはなしですけれども、重点をお話しいたします。

19神は凡ての満ち足れる徳を彼に宿して、20その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万の物をして己と和がしむるを善しと為給いたればなり。21汝等もとは悪しき業を行いて神に遠ざかり、心にて其の敵となりしが、22今は神キリストの肉の体をもて其の死により汝等をして己と和がしめ、潔く瑕なく責むべき所なくして、己の前に立しめんと為給うなり。

19節に、

「万の物をして己と和がしむる」

と、22節にも、

「汝等をして己と和がしめ」

と書いてある。これは、講和条約を結んで戦闘状態から平和にかえる、そういうような時に使う言葉なんです。それをパウロが使う。

「悪しき行いをなし」というのは、悪しき行いの前には「悪しき思い」がなければ、行いにならない。いつも、こころの問題なんです。行為は、その結果に現れたもの。現れない奥の世界、これは誰にも分からない。自分にだけ分かっている。その悪しき行いというのは、いわゆる善悪というよりも、もとは罪なんだ。「罪」とは己を中心とすること。自己中心は我が強いという我、自我です――自己という言葉は悪くはない。自己の自覚は大事なんだ――「自我」というと、我執的な気持をもっている。己に執らわれている。

「自由、自由」

なんていっているのは、実は自由ではない、みんな我執なんだ。自己本位で自由なんて思っていると、とんでもないはなしだ。それは実は我執なんだ。一般にいわれている自由というのは我執で自己本位なんだ。そういう現象が多い。それから悪しき行いということになる。ところが、自己本位でありながら、行いは善さそうにみえる偽善者もある。困ったもんだ、人間というのは。

神さまからそれている。

「心にて其の敵となりしが」

と、神さまに逆らっている。

「キリストの肉の体」

という言い方もおかしいですけれども、

「地上にロゴスがサルクスになった」

という、あの「肉」という言い方で、我々と同じ人間の姿になった。罪にさらされる。けれども、キリストは罪を犯さなかった。

「**其の死によりて**」
とは十字架の死です。神さまがキリストの十字架を通して
「**己と和らがしめる**」
という。この「和らがしめる」という言葉は私は実はあまり好きでない。和解、和らがしめるという言葉をパウロは随分使っているが、むしろ、敵しているんだから、我々は「赦される」わけなんです。対等的に和睦するわけではないのですから。「和らがしめる」という言い方は、どうも私はもったいなくて、そんなことは自分の側に受けとるわけにはいかない。和らぐどころでない、
「申し訳ありません、降参させられました」
と、むしろはっきりそう言った方がいい。神さまに降参させられて、そして、赦された。それがありがたいんだ。
人間の肉体には癌が一番恐ろしい病気だけれども、癌より恐ろしいのは心の癌、魂の癌は我執なんだ。だから、
「万人は罪びとだ」
という。
「**義人なし、一人だになし**」
という。そんなのと和らがしめるなんて、冗談じゃない。こちらは、その我執も赦された。赦されたから我執がなくなったか、というと、なくならないんだ、相変わらず。死にいたるまで人間はダメなんだ。完全に我執がなくなった人は、まぁ、アッシジのフランシスみたいな、ああいうのは我執がないでしょうね。狼もなついてしまった。
「己と和らがしめる」というと、
「そうか、神さまは和睦してくれたか」
と、冗談じゃないよ。和睦されるような資格は、こっちにはないんだから。赦された、降参させられたんだ。キリストに降参させられると、
「参りました！」
とこちらが告白できると、そうすると、上からの光、力、生命が入ってくる。「参りました」と降参し平伏さなければ。
「己の前に平伏させた」
と、私はどうしてもそういうことでないと、私には本当の力もこない。

●みな賜りたる現実

22 **今は神キリストの肉の体をもて其の死により汝等をして己と和がしめ、潔く瑕なく責むべき所なくして、己の前に立しめんと為給うなり。**

パウロはエライことを言っている。けれども、我々が神さまの前に、「潔く瑕なく責むべ

き所なき」現実に入れますか。これは、キリストの十字架においては、本質的には潔さとか瑕なさとか、そういう恵みをいただいている。その恵みの現実としては、受けとります。しかし、相対的現実としては、我々は――少なくとも私は――地上では潔く責むべき所なきなんていう人間にはとてもなれない。十字架なしには生きていられないんだから。

内村先生もしょっちゅうそれを言っていた。無教会で、内村鑑三をはじめ、とにかく

「十字架、十字架」

と言っているのはそこなんだ。けれども今度は、十字架が観念になってしまって、聖霊の世界に入らない。これがまた困ったものだ。

「十字架の恩寵で私は無になりました、潔くなりました」

なんて思ったら、ダメなんだ。なったんじゃない。それはみな賜りたる現実です。人間は、上側は波がたっている。ところが、波のたたないどん底の素晴らしい世界を、この十字架でもって、無私の世界をいただいている。これははっきり言える。

「私は無の現実を頂いています。根源の現実としては、罪なき世界は完全に私の中心にあります」

と、はっきり言えなくてはダメなんだ。でなければ、本当に十字架を受けとっていることにならない。相対的人間小池は相変わらず、波はあります――ゴマかしなしに、あります――けれども、この波に負けないんだ、この根底（根源現実）があるから。波に支配されない。支配されるようなことには、もはやならない。そういう根源の「無」の世界。そこには聖霊がくる。この聖霊をいただかなければダメなんだ。罪無きだけではダメだ。聖霊の光がきている。生命が、力が、愛が、智慧が。何でもいい。聖霊というのはいろんな内容をもっているから。だから、

「無即無限無量」

という。無限無量の質がきている。無限無量性ということ。神さまの無限無量性。量的にはまことに少ないものだ、けれども、質的には無限無量なものがきている。これははっきり言える。だから、非常に創造的になる。そういう意味で、キリストの十字架・聖霊を通すると、私たちは、

「神の姿に造られた」

というのは即如ということで、似姿ではない。神と同質に造られている。神と同質の世界に、神と一体となっている。「一」「無」。この「一」は数学的な1ではない。分裂のないところの世界を「一」、あるいは「無」という。形で表すと円形だ。

●太陽に絶対依存

太陽は地球に対しては絶対的存在です。我々は太陽の光で物を見ている。太陽の光が来なかったら、何も見えない。太陽の熱がなかったら、みな死んでしまう。地球とその上の

すべての存在は、太陽に絶対依存している。質的に太陽と一つみたいにされてしまって、太陽の光の中に、生命の中にあるんだ、地球というのは。我々もそうなんだ。だから、お天道さんを拝む人がある。結構です、どうぞ拝んでください。

この太陽そのものが、大宇宙のごく小さいもので、神さまの驚くべき創造の業として出てきた。それでは、

「神さまとはどんなものか」

と、これは絶対にこっちからは分からない。ミケランジェロは鬚のはえたお爺さんを描いたけれども、あれは芸術の上でただ表現しただけのはなしだ。神さまは相が無い。無相なんです。無相だけれども、その無相がいろんな現象において相を表している。その表された最大の相はイエス・キリストです。

ヨハネ伝で「ロゴス」といっているキリストが――「ロゴス」という言葉は「言」とも何とも訳せませんよ――即ち、霊的な存在です。

「初めに霊的存在としてのキリストあり」

と、それが人間と同じ姿をとった。「肉となれり」とはそのことだ。パウロが「肉」というときには、別な二つの言い方があります。今言ったキリストの肉は、我々と同じ具体的な存在のこと。ところが、パウロがロマ書で言っているところの「肉」というのは、自己本位、我執が「肉」なんです。いわゆる肉情的なことではない。我執を「肉」という。「霊」というのは神本位、キリスト中心のことです。

中世の神秘家というのは――「奥義」「ミステリオン」というのは「神秘」という字ですから――素晴らしい。エックハルトとか、タウラーとか、ゾイゼとか。中世の神秘家はキリスト抜きなんです。

「キリストにならいて」

だけれども、キリストをただ模範みたいにしている。本当にパウロがつかんだような、贖い主としてのキリストとちょっと違うんだ、中世の神秘は。けれども、悪くはない。非常に神さまと一つとなっている境地に入った。もちろん、アッシジのフランシスや何かは、非常にキリストに拝み入っていますけれども。

『ドイツ神学』（テオロギア・ゲルマニカ）

という本がある。これもキリスト抜きだね、読んでみると。とにかくしかし、

「自我はダメだ、我を捨てろ」

と。

「イッヒ、マイナー、ミア、ミッヒ」（私は、私の、私に、私を）

なんていう、ドイツ語はたくさん代名詞を使うけれども、「我」というものから「無我」の状態に入れと。これは禅宗と同じなんだ。中世の神秘は聖道門です。けれども、とにかく、神さまと一つになるということを非常に、我を投げ捨てて、祈りの世界でやったわけだ。

●絶対他力本願

人間の側から神というものを考えること自身が実は間違いです。神さまは絶対的な存在で、絶対的なものを人間が思う、対象化することはもはや二の世界です、一の世界ではない。それは不可能です。間違いです。だから、本当の意味の「神」「ゴッド」というものは、対象化することができない。

では、どうすればいいか。こっち側から哲学し思索してもダメなんです。これは上からの啓示によるよりか仕方がない。だから、イスラエルにはヤーヴェーの神として、アブラハム以下、神さまから語りかけてきた。神さまから捕まえられた、神さまに導かれていった。全部、神が主体なんです。こっちが動かされている。預言者がそうです、

「エホバ、かく言い給う」

と。キリスト自身が、

「私が語っているのではない」

と、そう言っているんだから。

「私が言っているんじゃない。神さまが言わせる事を言っている。自分がしているんじゃない。神さまにさせられている。ちっとも善くはない。神さまだけが善い」

と。キリストは

「父よ！」

と祈って父から光を、一切のものを受けとっている。神が絶対に主体で――文法的にいうと、神は主辞であって賓辞（述語）を持たない――賓辞を持たない世界が本当の神の世界なんです。だから、我々は完全に受け身です。

「造られたるもの、呼ばれたる者、捕まえられたる者、赦されたる者、贖われたる者、生命を与えられたるもの」

全部、これは受け身のかたちです。

浄土真宗だね。親鸞のあの信仰は素晴らしい。私は信仰の本当の姿は、やっぱり親鸞の浄土真宗だと思う。一番、福音に近い。親鸞は救われても、

「私は地獄へ往くか、極楽へ往くか分かりません。とにかく、法然の言ったことをまともに受けとってやっているだけのはなしです」

と。そしたら、とうとう――マネしてやしない――彼は本当のその世界に入ったから。

「私は煩悩熾盛なる者でどうにもならない」

と。それで、本当に

「南無阿弥陀仏」

一点張りで、それも法然みたいに何万遍も称名しない。

「本当の南無阿弥陀仏はただ一遍でいい」

と。絶対他力本願です。本願を受けとる世界です。「聖意」は「本願」だから。太陽という

存在は地球にとって絶対的な存在でしょ、この相対界で。だから、我々が信ずると信じないとにかかわらず、人間の側の信仰なんて大したことではないんだ。

「自分の信仰なんか問題にするな」

と私は言っているでしょ。問題にするのは相手の、啓示の力、光、生命です。だから、

「十字架・聖霊」

これが私たちが受けとっている奥義なんです。福音の奥義は、この十字架と聖霊、不可離の世界です。離すことができない。十字架だけでもダメ、聖霊だけでもダメ。聖霊だけでもって、

「俺は霊的になった」

なんて言って、霊的に思い上がったら、サタンがとりこにする、霊的傲慢はサタンだから。

「十字架、十字架」

と、十字架ばっかりやっているのもダメ。

●絶信の信

「潔める」という字は、我々は地的な我執的な世界から、

「神・キリスト中心の世界に分かたれた」

という字です。「聖徒」というのは

「神の世界に分かたれたる者」

という意味なんです。

「私は神聖な聖人みたいになりました」

ということではない。聖徒というのは、

「神の民にされた者」

ということです。「ラオス・テウー」「神の民」という、神族なんです。神族にされた者というのが聖徒です。

神族だけれども、相変わらず神族でないような、人間はそういった二重構造だ。しょうがないよ、死に到るまで罪びとに過ぎないんだ。ただ、我々はもはや我執というものが主にはなっていない。ただ、波の世界だ。波の世界で、波よりかもっと静かな世界を持っている。人間の心の中には、雲はいくらでもある。しかし、晴れた空がその上にある。成層圏をいただいている世界なんだ、魂が。それが聖徒だ。相対的に

「潔くなった、潔くならない」

と、そんなことを言っているのではない。やはり救いは絶対なんです。十字架・聖霊の救いは絶対なんです。これは賜りたるものだから。こっちからつくったものではないんだから。

「自分の信仰」なんて言って、

「まだ私は信仰が足りないから、信仰を深くしよう」

なんて、ご苦労さんだから、止めてしまえ、そんなのは。

「絶信しろ、自分の信仰なんかに絶しろ。そうすると、キリストの信が入ってくるから」

と。これを

「絶信の信」

という。我々は自分の信仰なんか捨ててしまっているから、捨てるというと、賜りたる信が上昇カーブで上がっていく。絶信から、もの凄い上昇カーブで、賜りたる信仰が上がっていく。

「天国は、そこにある、ここにあるなんていうものではない。お前たちの中にある」

と、キリストが言ったでしょ。

「神さまの世界はお前たちの中にあるじゃないか」

と。キリストはまだ十字架に架からない前に、贖いもしないうちから、その先のことを見て、そう言っておられた。だから我々は、

「エン・クリスト」（キリストの中に）

キリストは、

「エン・エモイ」（私の中に）

という。我々は、

「私の中にキリストがいたもう」

と言える。「の中に」、これは正に「一」の世界です。自分の方は、もう罪から解放されている。だから、私は、根源ということを言う。

「根源現実」

だと。相対現実ではない。

「根源の現実では、私には罪はありません。キリストの十字架は、救いはそれだけ徹底したものです。過去・現在・未来の人間小池の罪なんてものは、我執なんてものは、全部十字架されてしまっていて、ありません。けれども、それは根源現実で、私も波はたちます。けれども、その波にもはや支配されません」

と、こういうわけだ。どこか間違っていますか。

●本当にキリストを受けとっているか

何々派でもいいよ。ルターが宗教改革した後で、新教にはたくさん派がある。旧教には派がない。ところが、派がない旧教、カトリックは、形式の上では非常に整っている。また、その中には非常に祈りの深い素晴らしい人もいます。けれども、新教はたくさんいろんな宗派があって、ゴタゴタしている。いいよ、どれでも。いろんな花があって、ただ、その

花は全部、太陽の光を受けて、赤くなったり黄色くなったり白くなったり、いろいろしている。匂いも形も、どれでもいい。要するに、太陽の光と熱を受けて、全部これはほんものなんです。造り花ではないから。だから、

「新教のどれもが本当にキリストを受けとっているか。それだけが問題だ」

ということ。

「祈り方がどうだ、信仰箇条がどうだ」

と、そんな事は問題じゃない。問題は、

「本当に十字架・聖霊を不可離に受けとっているか」

そこだけです。「奥義」といえば、「十字架・聖霊」のことです。その聖霊はもちろん「復活」の生命をくださいます。甦りの生命です。

「死んでも死なないぞ」

とキリストは言っているんだから。「死んでも死なないぞ」というのは、

「肉体は死ぬけれども、滅びるけれども、死なない霊体が与えられる」

と、パウロが言っているとおり。霊的な質が、御霊の質がもう来ている。

このパウロの証しているところの福音の世界からズレたら、どんなに良さそうに見えても、それはダメなんだ。それだけははっきり言える。パウロというキリストに逆らっていたやつがひっくり返された。そうでしょ、彼自身がキリストに敵していた。だから、彼はこういう事が書けるんだ。ところが、復活のキリストにやっつけられた。

「何ぞ、我を迫害するか！」

と、ぶっ倒された。そして、これは神の器なんだ、

「お前はこの福音のために大いにやってもらおう」

と。パウロは百難を突破した。これはみな聖霊の力です。コリント後書11章に書いてある。

「この奥義から私はズレるわけにはいきません」

とはっきり告白しなければ。啓示に対して、我々は何を言うかというと、全部告白なんです。人を教えているんじゃない。私はあなた方に告白しているんだ。与えられたことをお話しているだけのはなし。

「こうしなさい、ああしなさい」

なんていう新しい律法は一つも要らん。

「クリスティアーノス」（クリスチャン）というのは「キリストのもの」ということです。本当にキリストのものになっているか。「クリスチャン」なんていったって、観念化されてしまって、どうのこうのと議論ばっかりしている。

だから、仏の世界でも、

「如来と一つにならなければダメだ」

ということ。

「親鸞の身辺に光が射している」

なんていうのは、完全に魂がその世界に入っているから。天下無敵ということは、もう次元が違うから、相手にしないんだ。キリスト道でも仏道でも、そういう第一級の人物がいますから、読むと楽しい。

フランシスもそうです。サンダーシング、ザビエル。プロテスタントには、ルター、カルヴァンは、そういう意味で、ちょっとまだ至らないところがある。もちろん、別な意味で、素晴らしい所に入っていますけれども。とにかく、聖書の元の世界に戻ろうとしたのが、ルターだのカルヴァンだ。人間はそれぞれ癖があるから、その悪い癖が出ているわけだ。そんな悪い癖はあまり問題にしなくていい。ルターの中心は何だったか、カルヴァンの中心は何だったか、その光を見ていけばいい。

●恵みと賜物

23 汝等もし信仰に止り、之に基きて堅く立ち福音の望みより移らずば、斯く為らることを得べし。此の福音は汝らの聞きし所、また天の下なる凡ての造られし物に宣べ伝えられたるものにして、我パウロはその役者となれり。

パウロは、「もし」という言葉をよく使う。「汝等もし信仰に止り」、この「止まる」という字も、「エピメネイン」という字で、普通は「メネイン」というが、ここには「エピ」がついていて、「しっかり止まる」という意味です。「もし移らなければ」なんて仮定で言っているけれども、

「移らないだろうね」

と言っているんだ。むしろ、この仮定的な言い方で強く言っていると、そう受けとらなくてはいかん。

「我パウロはその役者となれり」

「役者」という言葉は「ディアコノス」という字で、「奉仕する者、仕える者」のことです。

「人の子は、人を使うためでなくて、仕えるために来たんだ」

と、キリストも言っておられた。僕、婢、奉仕者。報いを求めない、無料奉仕。感謝してくださるものは受けとるけれども、

「どれだけ支払え」

と、そんなことを言っているんじゃない。神さまから無料にいただいたんだから、無料に分ける。キリストは我々、一人一人に対して、全的にくださっているんです。十人いれば十分の一のキリストが来たと、そうじゃない。そこが宗教のミステリオンの世界です。一人一人が全的にキリストを受けとる。

「我自身を汝にやるぞ」

という、これが恵みなんです。恵みにも、二とおりある。これが本当の恵みです。キリスト自身が、十字架・聖霊という全キリストが恵みなんです。恵みの主体なんです。それから、

一人一人にいろいろなものが来る。その人によって、

「こういうことをあなたはしなさい」

という、そこに賜物（たまもの）というものが来る。「恵み」は「カリス」です。「賜物」は「カリスマ」という。カリスマは一人一人いろいろです。知的な人もあるし、情的な人もあるし、意志的な人もあるし。それがみなキリスト中心に動いていけばいいんだ。智慧もいろんな智慧がある。技能もいろいろな技能がある。みなそれぞれ神さまからの賜物なんだ。

落ちこぼれなんていうものはひとつもないですよ。教育の世界で「落ちこぼれ」なんていう言葉を使っては本当はいけないんだ。どんな子供でも必ずその子供の中心なものがある。それを、母親も父親も先生も、それを見て、そこに中心を置いて大いにその子供を伸ばしていこうと。子供は自覚していないから、そこははっきりしてやる。そして、仕上げていけばいい。

ところが、日本の学校制度は、受験制度は、

「科目は何科目で点数は…」

と、そうじゃないよ。たくさん学校を造って、

「さぁ、お入りください」

と、中で鍛えてやればいいんだ。それに沿わなければ、

「お前は、ここではダメだね、出ていきなさい」

と、これは仕方がない。そういう学校がいい。

今の教育制度では困る。

「受験、受験」

でもって、予備校のまた入学試験までもある。とんでもない話です。ヨーロッパに行くと、予備校なんかありはしないから。日本は困ったもんだ。政治の一番大事なのは教育の問題です。教育の世界がこれでは全くしょうがないんだ、いつまでたっても。

というのは、制度も制度であるけれども、教育者自身の問題です。教育者自身が、神・仏の世界を持たなかったならば、天を相手にしなかったならば、ダメです。

●霊的なダイヤモンド

結局、ペンテコステで三千人位ひっくり返ったけれども、本当にキリストにつながってきた者は、やっぱり、新約聖書を書いた連中だけだ。まだ他にいたかも知れないけれども。パウロ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ――マタイ、マルコ、ステパノも二義的に入れてもいいけれども――とにかく本ものは数名です。だから、皆さんは、ただ本当に奥義を受けとること、キリストと一つになっていく。キリストと一つになるのは自分からなるのではない。一つとされるんです。

「ありがとうございます」

と。キリストの贖いと聖霊を受けたら、他に何もいらない。

「この火燃えたらんには、何をか要せん」

とキリストは言っているんだ。聖霊の火が燃えたら、どんな嵐がきてももうこれは消えない。クリスチャンほど熾んなるものはない。くすぶったような顔してたらダメだ。私はくすぶってなんかいられない。雲はいくらでも走れと。しかし、

「雲のかなたには、太陽はそれでもなお照っている」

（ビハインド　ザ　クラウド　イズ　ザ　サン　スティル　シャイニング）

という、ロングフェローの詩の文句がある。太陽は雲を貫いても照っている。

「キリスト召団」はそういうので、そこからズレる人は自分で出ていきますよ、ズレる人は自分で。

「ああどうぞ、ご勝手に」

と。どこかで突き当たって、やっぱり元に戻らなければいけないと気が付いた時は戻ってください。

「それはダメです」

なんていって、ゴタゴタ議論する必要なんか一つもない。

「ああどうぞ」

と。私は本当の意味においては自由を尊重しますから。ところが、自由が自由でない、さつきから申し上げている我執的な自由がたくさんある。

あなた方は、もうそれは大変なダイヤモンドを、ダイヤモンドもかなわない霊的なダイヤモンドを頂いているわけだ。キリストというダイヤモンドを抜かしてたまるものか。大変なひとです、イエスという霊止（ひと）は。お釈迦さんは最後に悟ったんだけれども、悟る必要はないんだ。キリストは初めっから悟っている。

「善き先生」

と言うと、

「なぜ、私のことを善きというか。神さまの他に善きものはないじゃないか」

と。私は、キリストのああいう言葉は大好きだ。キリストは聖人以上のひとだけれども、自分をひとつも思っていない。何ものともしない。

この「何ものともしていない」という、「無」の世界に入って、そして、神さまと一つになろうと一生懸命にやったのが、さっきから言っているところの、中世の神秘家たちなんです。彼らは、

「そういうキリストを大いに学びましょう」

とやっているわけだ。学びましょうじゃないんだ。キリストを受けとれば、そういう世界に入るんだ。だから、ガンバル必要はない。力が来てしょうがない。頑張っていたら、く

たびれてしまう。

●全キリストが奥義の中心

24われ今なんじらの為に受くる苦難（くるしみ）を喜び、又キリストの体（からだ）なる教会のために我が身をもてキリストの患難（なやみ）の欠けたるを補う。

パウロは苦難を喜んでいる。教会はキリストの体です。「無教会」というのは間違いだ。教会が形式的になったから、

「教会がなくてもいけるんだ」

と内村先生がやった。それは歴史的にはいい。けれども歴史的なその無教会をいつまでも、

「無教会、無教会」

とやっているのは、何をやっているのかと言いたくなる。内村先生はそんな、無教会に拘泥しているような無教会ではないんだ。「教会」というキリストの体はあるんだから。

「では、キリストの体にならないのか」

と言いたくなるよ、無教会なんていったら。

「キリストの患難の欠けたるを補う」

という、パウロのこういう言い方は、あなた方は、ヘンだと思わないですか。冗談じゃない。キリストの十字架の患難は全的な患難ですから。「欠けたるを補う」なんて言い方をパウロはしているけれども、

「その続きをやっていきます。キリストの患難の続きを受けとってまいります」

ということだ。それで、パウロは事実、それだけの患難を受けとって進んで行った。

「そうか、キリストも欠けていたのか。それでパウロが補ったのか、偉いな」

なんて、冗談じゃない、ちっとも偉くない。こういう表現をするから困るんだ、「欠けたるを補う」なんて。

「キリストの患難に更に付け加えて行きますよ」

ということです。

「主にのみ十字架を負わせまつり……」（讃美歌331番）

という讃美歌があるでしょ。

「お前たちも自分の十字架を負って来い」

と、キリストは言われた。あれのことだ。

25われ神より汝等のために与えられたる職（つとめ）に随いて教会の役者となれり。26これ神の言、すなわち歴世歴代（よよよよ）かくれて今神の聖徒に顕れたる奥義を宣べ伝えんとてなり。27神は聖徒をして異邦人の中なるこの奥義の栄光の富の如何許（いかばかり）なるかを知らしめんと欲し給えり。此の奥義は汝らの中に在（いま）すキリストにして栄光の望みなり。

「奥義の栄光の富の如何許なるかを」、要するに、十字架の贖いも聖霊も何かというと、神の愛です。神の愛、キリストの愛です。力ある愛ですよ、これは。人を助ける愛。だから、奥義は、ただ意味じゃない。全キリストが即ち奥義の中心です。

それで、我々はこの奥義を受けとったら、それでもって動いていかなくては、人を助けていかなくては。

「助けざるを得ない、福音を伝えざるを得ない」

という、ざるを得ない世界です。新しい律法ではない。そうやっていると、それが神・キリストの栄光なんです。栄光を求めやしない。その現れていることが栄光なんです。パウロは本当にそれを実証した。使徒行伝のパウロの在り方をみても、パウロの書簡をみても、言葉でも行為でもパウロは実証した。

「此の奥義は汝らの中に在すキリストにして」

と、ちゃんとここに書いてある。

「この奥義は汝らの中に入っているところのキリストなんだ」

と。そして、やがて大きな神の栄光の望みがくる。キリストも復活して天界にいかれたのもこの栄光です。十字架、復活、昇天、全部これは奥義から栄光に向かって進んでいく。そして最後には、新天新地において我々を迎えようという。

●すべての愛は神さまから

地球は決して良くはならない。21世紀は本当に危ないね、こんなことをしていると。人類の歴史は惨憺たるものです。自然を害して、自然がおかしくなって、段々、海がふくらんで来たという。自然を害して、今度は植物がおかしくなって、動物がおかしくなって、動物や植物がおかしくなれば人間もダメになる。戦争どころのさわぎじゃない。物理の世界で原爆みたいなものまで造ってしまって、これが大きな禍害（わざわい）になってしまった。

だから、そこへいくと、仏教は文化的な進展はしない。仏教の世界は悟りで、

「現実をあるがままに悟っていこう」

という。キリストの山上の言葉の中にも、

「お前たち、思い煩うな。神さまがちゃんと心得ているぞ」

と。ああいう点は、ちょっと仏教は似ている。ところが、創造的な面を大いにやって、そして今度はやりすぎてしまって、創造者を忘れて、人間のただ頭と欲でもって始めたから、この文明がおかしなことになってしまった。

福音の世界は非常に動的なんです。仏教の世界は静的です。ところが、本当の福音は静も動も持っている。この静動一如、これが本当の世界なんです。東も西もない。だから、福音の動的な面の善さと、それから、仏教の静的な面――じっと、あるがままを悟っていく――その両方共を渾然（こんぜん）として福音の世界はちゃんと展開できるんです、静けさと強さと

を。そして、この動は愛の動でなければダメです、愛という質をもたなければ。

すべての愛は神さまからきている。恋愛であろうと何であろうと。それでなければ結婚も成り立たない。それを、神さまから来ているのを忘れてしまって、人間のただ感情だと思って、ゴタゴタやるからおかしなことになる。その点はゲーテというのは偉い。

「愛は全部神さまからだ」

という、大きな魂です。だから、ギリシア語では、アガペー、フィロース、エロースと、いろいろ、愛に種類があるが、そんな種類は要らない。全部、一つです、上からのもの。賜りたるものは全部、それ自身ちっとも悪くはない。全部それは神中心に動いていけば、全部それは祝福される現象なんです。

それやこれやを私は渾然と詩の世界で描きたいと思っておりますから。まだ10年かかる。詩人では何といっても、ゲーテとダンテだ。凄いね、両方とも。とにかく凄い。詩そのものとしては、ゲーテやダンテにはとてもかなわない。彼らに匹敵しようなんて思ってません。ただ内容的に彼らのまだ言わなかった世界は展開するでしょう。

●キリストの割礼

コロサイ書第2章です。

11 **汝らまた彼に在りて手をもて為（せ）ざる割礼を受けたり、即ち肉の体（からだ）を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり。**

パウロが、素晴らしい言い方をしている。いわゆる旧約的な割礼ではない。キリストの割礼は、生まれつきの心を切ったような割礼なんです。

「即ち肉の体を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり」

と、こういう言葉は、パウロは自然に出てきたと思う。考えてないです。禅宗でもって、「心身脱落」というね。心も身も脱落する。

「体を脱ぎ捨てる」

というのはそれなんです。体は大事なもんですよ、いただいた身体は。神さまのために大いに健康で使ったらいい。病気になることはひとつも良くはない。

「体を脱ぎ捨てる」

という言葉に躓かないようにしてください。

「そうか、それでは自殺しようか」

なんて、冗談じゃない。

「古き我を脱ぎ捨てる」

ということを、パウロは「体を脱ぎ捨てる」という言い方をするものだから。

「パウロさんはどういう気持で言っているか」

ということを、やっぱり聖霊の智慧と光でちゃんと読めるんです。ギリシア語ができすぎ

ると、逆に今度はギリシア語に捕らわれてしまってダメになってしまう。ギリシア語でもヘブライ語でも。だから、

「ギリシア語やヘブライ語ができれば聖書はよりよく分かる」

なんて何を言っているかと私は言いたくなる。若い人は大いにギリシア語もヘブライ語も勉強してください。何もけなしているのではない。

「それにこだわったらダメだ」

と言っている。

12 **汝らバプテスマを受けしとき、彼とともに葬られ、又かれを死人の中より甦えらせ給いし神の活動を信ずるによりて、彼と共に甦えらせられたり。**

「神の活動を信ずる」

なんていう、こういう言い方をするから困るよ。「神の活動を受ける」でいいんだ、「信ずる」なんて言わなくたって。神の活動を受けて、キリストと一緒に甦らせられた。

13 **汝ら前には諸般の咎と肉の割礼なきとに因りて死にたる者なりしが、神は汝らを彼と共に生かし、我らの凡ての咎を赦し、14かつ我らを責むる規の証書、すなわち我らに逆う証書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、15政治と権威とを褫ぎて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給えり。**

「責むる規の証書」とは旧約のことです。旧約の律法、そんなものは塗り消してしまった。パウロは散々そこを通ってきたから。律法まで十字架につけてしまった。「政治と権威」は現世の悪い勢力だから、もの凄く戦っている。今の政治家も困ったものだ、

「政治と宗教は別々だ」

なんて言っていて。しかし、政治家が宗教の世界を衷にもたなかったならば、本当の政治はできない。教育者でも、実業家でも、何でも皆そうです。

●天を相手にせよ

西郷南洲は、

「天を相手にせよ」

と言った。景教がシルクロードを通ってやって来た。ネストリアンという。ネストリアヌス。それがずっと伝わって、それを受けとったのが日本の坊さん。それが今度は中江藤樹に来た。中江藤樹の書いたものは、中身が非常に聖書的なんです。中江藤樹、熊沢蕃山、云々と、そして最後には西郷南洲まできている。南洲もやっぱり間接的には聖書の真理を受けとっていたんだ。だから、ああいうことを言えた。

「己を愛するは最も悪いことだ」

と、こんな事を言っているのは、これは聖書の言葉だから。

「自分の身を憎まずば我が弟子となることはできない」

とキリストが言ったでしょ。自分を憎めるか。憎むよりも、キリストの恵みが楽しくてしょうがない、ありがたくてしょうがないから、憎むなんて言わなくても、

「自分なんてものは問題にしません」

と、そういうことになる。私は自分なんてものは問題にしてないから、その点では。言葉というものは困ったもんだ。語ると、あと別な反面が抜けてしまったり、受けとり方によっては、誤解されたりする。だから、本当のものが自分の中にないと、それが見えない。本当の受けとり方ができない。だから最後には、

「言葉は災いなる哉。沈黙することが一番いい。結局、本当の真理は沈黙して受けとるよりか仕方がない。受けとって黙っているよりか仕方がない」

ということになる。黙っていれば、今度は何かというと、

「存在そのもので現せ」

ということです。

「沈黙は金にして、雄弁は銀なり」

というけれども、沈黙は金ではない。沈黙して本当にそれが存在をもって現すところのものが金どころでない、これはダイヤモンドだ。そのダイヤモンド的に光っていたのがこのパウロだ。パウロ、ヨハネだ。こっちでいうと、親鸞だとか、道元だとか、ああいう連中だ。だから、超一流の坊さんは、とても楽しく私たちが読めるのは、この福音の世界と次元的に似ているからです。

「ああ、その通りです」

と分かる。けなさいない。

「そこには十字架がないから」

なんて、下らないことは言わない――「くだらない」といったらおかしいけれども――私の気持が分かるね、あなた方は。

●**あらゆる過ぎゆくもの**

16 **然れば汝ら食物（くいもの）あるいは飲物につき、祭あるいは月朔（ついたち）あるいは安息日の事につきて、誰にも審かるな。**

「誰にも審かるな」とあるけれども、

「いいよ、どう審いたって、そんなものは問題にしません」

と、パウロにそう言ってやればいい。もう、こういう旧約的な飲物だの、お祭だの、月朔だの、安息日だの――この安息日というのは旧約のユダヤ教の安息日です――につきて誰にも審かるな、と。審かれたっていいよ、そんなのは本当の審きにはなりはしない。

17 **此等はみな来らんとする者の影にして、其の本体はキリストに属（つ）けり。**

影と本体、これはおもしろい。

„Alles Vergängliche
Ist nur ein Gleichnis.“
「あらゆる過ぎゆくものは
映像に過ぎず」

というゲーテの有名な言葉がある。「映像に過ぎず」という訳は本当はあまりよくない。

「映像たるのみ」

です。何の映像かというと本質、本体の映像。

「あらゆる過ぎゆくものは
映像たるのみ」

です。聖書の言葉の中には、

「過ぎゆくものは問題にするな」

というような所がヨハネ書簡の中にもある。

この過ぎゆくもの、花は段々枯れる。根のある花はなかなかしぼまない。ところが、切り花は、その時はよさそうだが、しおれてしまう。ところが、切り花でも、その瞬間には素晴らしく咲いている。こういう過ぎゆくものに永遠性を見なければいけない。

「ああ、過ぎ行くものか。過ぎ行くものだからこれは面白くない」

では、ダメなんです。

過ぎ行くものの中に永遠性を見る。我々の生涯も過ぎ行くものです、地上で何年生きようが。その中でもって、永遠性を本当にあらわしているか。そこだけが問題です。長生きするからいいのでない。私の兄貴は27才でたおれてしまった。けれども、あの兄貴の生き方は永遠性を持っていた。そこにおいて永遠的なものを現していたから、私は後からそれを受けとった。

そういう過ぎ行くものを、何でもそれが本ものであったら、それを本当に尊重する。切り花でもいい。

「これはすぐ枯れてしまうからおもしろくない」

ではない。私は虹が好きだ。虹というのは直ぐ消えてしまう。虹は七つの色を持っている。無限の可能性を有った色を持っている。神さまの無色透明の光を受けとると、無色透明の水滴がたくさんの光を現す。素晴らしいものだと思う。だから、私は自分の号をこの頃、「天弓」と書いている。

過ぎ行くものが神さまの栄光のすがたなんです。

「過ぎ行くものは本質の――太陽の光の――映像である。正に映像そのものである」

という言い方です、あの「ヌール」（のみ、だけ）というのはそういう意味にとらなくてはいかん。ゲーテというのは、最後のあそこの所は素晴らしい。

「この天界においては、未だ及ばざるものが全部ここでもって成し遂げられている」

と。宇宙的な魂です、ダンテもゲーテも。

そういうわけで、どんなちょっとした行為も、

「渇いた人に一杯の水をやることも空しいことではない」

と、キリストは言われたでしょ。だから、我々は、日常生活において、ちょっとしたものを見ても、あるいはちょっとした事をやっても、それが本当の世界から、「ヴェーゼン」「本質」の世界から出ているのなら、全部、過ぎ行くものにして過ぎ行かざるものなんです。そういうものの見方をしていかなければダメです。ところが、いわゆる理想主義は、そういうものをみな

「ああ、これははかない」

と言って、けなす。けなしてはいけないんだ。信仰のない人でも、気持のいい人はいろんな事をしている。

「ああ、本当にありがとうございます」

と、感謝しなくてはいけない。人の品さだめは、やってはいかん。それが、本当に「無私」の心なんです。

●パウロのユダヤ教の癖

それで、パウロはいろんなことを言っている。もともとユダヤ教からきているものだから、時々、その癖が出てくるけれども。

19 **首に属くことを為ざるなり。全体は、この首によりて節々維々に助けられ、相聯り、神の育にて成長するなり。**

これは、キリストは首で我々は体だから、みんな手となり、足となり、耳となり、云々と。

20 **汝等もしキリストと共に死にて此の世の小学を離れしならば、何ぞなお世に生ける者のごとく人の誡命と教とに循いて、**

この世のつまらない知識やそういったすべてを「小学」といった。「小学校」や「大学」の小学ではない。この世的な知的のことを全部、小学といった。

21 **『捫るな、味うな、触るな』と云う規の下に在るか。**

そんな規の下にもはやいないじゃないか、福音の世界はおのずから律法を越えた、そして律法を満たすようなことになってしまった、と。

だから、

「学校のいろいろな校則はいりません。Be gentleman!（ビー　ジェントルマン）これだけでよろしい」

と、あのクラークさんが言った。

「学校の規則は一つも要らん。お前たち一人一人が、ビー　ジェントルマン、この言葉を本当に自分で体験していけば、規則なんか要らんじゃないか」

と、クラークさんのあの気持は非常に美わしい、素晴らしい。本当の意味で、

「福音的であれ」

というのは、そういうことなんだ。

「もう道徳も超越したから、勝手なことをしていい」

なんて、そうじゃない。本当の意味で満たしているんです。困ったもんだ。

親鸞のアレもそうだよ。

「南無阿弥陀仏と言えば、あとはどうでもいい」

なんて、そうじゃないんだ。本当の「南無阿弥陀仏」に入ればおのずからあるべき生き方を知らずしてやっているというようなものだ。人間の良心というものは、それを偽るわけにいかん。パウロがここに言っている通りだ。

「いわゆる律法の世界ではないぞ」

と。

22 **（此等はみな用うれば尽くる物なり）** 23 **これらの誡命は、みずから定めたる礼拝と謙遜と身を惜しまぬ事とによりて智慧あるごとく見ゆれど、実は肉慾の放縦（ほしいまま）を防ぐ力なし。**

「智慧あるごとく見える」けれども実はそうじゃない、見掛けだおしだ、偽善だ、と。パウロの言うとおりです。

●天国の身証体

だから、我々は大事な世界をいただいているんですから、あなた方一人一人の存在はもの凄い使命がある。栄光がもう既に約束されている。神の栄光が。問題だらけの世界にいながら、問題を持たないんです。妙なる哉だね、この福音の世界は。

「どうにでもなれ。天国はこちらが現じていくぞ、天国の身証体として」

と、こういうわけだ。

キリストは天国を現じて歩いていた。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、福音書のキリストは、何といっても凄い。天国を現じているんだから。最後の新天新地の原型をキリストはもう既にやっていたんだ。

「明暗」という言葉があるけれども、明も暗もどっちも必要なんです。暗闇は悪い、なんて思っているのは、本当は人間の錯覚なんだ。闇がなかったら、本当は人間は眠れないんだ、光ってばかりいたら。電灯をつけて寝ていると、目によくない。ちゃんと、自然の法則は我々にひとつも無理なことはしてない。そういう意味で、闇を本当に受けとっていれば、闇も本当の意味では、光の世界だ。

それで、奥義はいわくいいがたきところの内容です。「ミステリー」「神秘」という言葉は素晴らしい言葉だ。「ミステリオン」という字は、「ミュエオー」というギリシア語の動詞か

らきている。

「隠れたものを露にしていく、隠れたるものの秘訣を与える」という字です。神の神秘の世界です。この世界は頭では分からない。一番いいのは、全存在で体感するんだ。神秘の世界は、体で感ずるんです。

ゲーテが、

"Gefühl ist alles."

「ゲフュール　イスト　アッレス」

と言った。あれは、普通はみな

「情感はすべてである」

感情とか情感と訳している。あれは、私は「体感」と訳す。全存在で感ずること。「ゲフュール」の「ゲ」というのは、総体的な意味だ。「フューレン」は「感ずる」こと。本来の「ゲフュール」というドイツ語は、

「全的な感じ方で感得する、感じ得る」

こと。ものを分かるよりも、ものを感じなければいけない。「分かる」という言葉は頭に移ってしまう。感ずるんです。体感が大事なんです。「体」というのは全存在的ということ。全存在でもって感じ入る、感入する。無教会はこの神秘という言葉は大嫌いなんだ、

「信ずる、信ずる」

と言って。神秘の世界を体感しなければ、本当の即如の世界に入れない。だから、人を審く。

「私の信仰は義しい」

なんて、自分の信仰を私して、そして人を審く。そういうのは、キリストは大嫌いなんだ。自己義認というやつ。

●神さまを信ずるなら百％信じろ

28 **我らは此のキリストを伝え、智慧を尽して凡ての人を訓戒し、凡ての人を教う。これ凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて神の前に立つことを得しめん為なり。**

この「全くなりて」という言葉です。これは、我々は全くはなれない。「凡ての人をしてキリストに在り、全くなりて」の、「全くなる」という字は、「テロス」という字で――テレオロギー、目的論というドイツ語の言葉がある――「終り」という言葉と「目的」という言葉は同じです。「全く」「完全」というけれども、人間は完全でない。全くなると、終りを遂げると、後は行き所がなくなってしまう。目的を達すると行き所がなくなる。地上では、我々は目的を達することができない、どんなことをやっても。いや実に目的を達するよりも、限りなく目的に向かっていく。だから、私は全さよりも無限性の方が好きなんだ。

もし、「全き」という言葉を使うならば、完全性といったらいい。「完全」というよりも、

全的といった方がいい。全的ということは大事なことなんです。部分でありながら、全的でなければダメ。三日月は三日月でありながら、満月をちゃんと持っている。満月を約束している。上弦の三日月みたいなのは、全さを持っているところの月なんです。

部分的でなくて、全的であること。何をするのでも、全的であるということが大事なことです。子供の姿をみると、全的なんです。泣くにも、笑うにも、お母ちゃんにしがみつくのもみな、これは全的です。

私の孫を保育園に迎えにいくと、孫が友達と一生懸命で砂場で遊んでいる。名前を呼ぶと、いくら遊んでいたって、パッとやめてサーッと駆けてくる。ああいうのが、全的な姿なんです。大人になると、なかなか全的が部分的になって困るんだけれども。

「汝ら、幼児（おさなご）の如くならずば……」

とキリストが言われたのは、

「あの全的なすがたが大事なんだ。神さまを信ずるなら百％信じろ。治るだろうかではない、もう既に治っていると思って進んでいけ」

と。それが、この全的ということです。

完全性ということは大事なんだけれども、完全になってしまったら、お終いなんだ。行き所がなくなってしまう。だから、この全的ということは、実は、その中には無限性を持っている。それで、私は無限という言葉が好きなんだ。限り無く進んで行く。これでいいなんていう所はありはしない。ゲーテの『ファウスト』にしろ、ダンテの『神曲』にしろ、決して完全性ではない。無限性をもったところの作品である。ミケランジェロが彫刻をしても、最後の一つのノミは振るわなかったという。ということは、

「最後までやったら、これは人間の姿ではない、かえって偽りになる、未完成が本当の人間の姿だ」

ということ。「未完成交響楽」とはいい名前だ。

全さというものと、完全であるということは別問題です。ゲーテも、

「ダス　ガンツェ」「ガンツハイト」（全的）

という言葉が非常に好きだった。何でもかんでもよろずやさんという意味ではないですよ、この「全的」というのは。

「全くなりて」なんて、パウロのこの言い方は困る。日本語の訳が悪いのだか何だか知らんけれども。

「キリストにありて全くなりて神の前に立つ」

なんて、冗談じゃない。神さまの前に全くなって立てるか。

「キリストにありて全さをいただいて」

なら分かる。言葉というのは気を付けないとね。